

漢法苞徳塾資料	No. 202
区分	論説
タイトル	東洋医学の位置の問題と可能性
著者	八木素萌
作成日	92 年夏期合宿塾長講話

1. 民間療法・周辺医療や養生法の医学であるのか？または、単なる転調療法に過ぎないのか？
あるいはまた、悪口的に言うことが許されるなら、慰安的な手法・手技の一つであると、位置付けるのか？
いま、パラメジカルの一つとしての位置付けが、複数的に種々の方向から追及されているのは、明瞭である。
2. 東洋医学は医学の質として、未来の医学の中枢に立つことのできるものを持っている。それは何故か？十分に包括的で体系的な医学であるし大量な実績を持っていること、明解に研究方法論を持っていること、深く長い歴史に根ざしていること、若い頃『金瓶梅』を読んだ時の大きな衝撃（古代の刑罰・臓器移植などの大きな手術や・その為の麻酔などが見られたー今日の東洋医学的処置に、それらが見られなくなっているのは、本当に〈宗教的理由〉だったのであろうか？）は、侵襲性の激しい処置に、代わることができる方法のメドが、あったからではないのか？と思わせたものであった、などが言える。また、導尿・浣腸は『傷寒雜病論』に見られ、膝関節から炎症漿液を抜き取る処置は、既に『黄帝内経』の記述に見られる。また、溺死や縊死を蘇生させた記述が、明代以前に見られる。
3. しかし、今のままでは、この21世紀の医学の中枢に位置しうほどの可能性をはらんでいる質は、単に可能性のままである。自ら乗り越えなければならない重要な課題があるだろう。
今は、東洋医学の歴史が持っている、その質の帯びている巨大な可能性は、急いで磨き上げられる必要がある。磨かなければならないのは、ヒトの知識と認識と思考方法論が達成しているものが、近代以降の、いわゆる「科学的研究方法論」と「科学的知識」が、行き当たっている「壁」の状態が、深刻であるからである。
4. この思考方法に、取って代われるものは、少なくとも医学においては、東洋医学の歴史を支えて来ている思考方法以外には、あり得ないからである。漢法医学の思想方法である「陰陽五行論」を、中国が「素朴唯物辨証論」と把握しているのは、断じて正しくない。
5. 華佗が麻酔して回復手術を行なったのは200年頃、徐文伯が「婦人の瘕（子宮癌の手術?）」を治療したことが記述されたのは465年、マラリヤが蚊による病であると認識していたことが586年頃であると『千金要方』に記述されている、脳梗塞・脳出血などの診別と治療について、大いに論争されているのが、金元四家の頃の事（1160～1200年位）である。これらは、相応する

診断の理論と知識と、臨床的な蓄積が無ければ不可能な事である。この蓄積が、医学理論に隠されているし、秘伝として伝承されて来た「術」に含まれている。これらを、明らかに「日に当てる」仕事が必要である。そして、今日的に伝承されてゆく形に造りかえる事が必要である。日本では「産婆」と「骨接ぎ」の技術と知識が失われたことが、心ある専門家によって嘆かれているが、鍼灸の学術も、同じ道をたどって行く危険性が、心配である。